

庄川改修と内川の分断

会員 奥川光治

写真は、昨年 12 月 3 日、富山湾を愛する会のイベント、旧新湊・六渡寺の街歩きに参加したときに立ち寄った六渡寺公民館に掲げられていた古地図です。この地図では、庄川が小矢部川に能町のあたりで合流しているのがわかります。現在のように庄川が小矢部川から分離されたのは 1912 年(大正元年)のことで、この改修工事は 1896 年(明治 29 年)の大雨による洪水により高岡市が大きな被害を被ったことがきっかけでした。放生津潟から小矢部川河口付近まで流れていた内川が、このときに新しい庄川によって分断されたわけです。

庄川は古代から洪水を繰り返し、そのたびに流路を変え、扇状地を形成してきました。奈良時代の庄川は、現在の砺波市庄川町金屋から北西に流れ、小矢部川に合流しており、合流前は「雄神川」、合流後は「射水川」と呼ばれていました。万葉集には、奈良時代の越中守、大伴家持が詠んだ「雄神川紅にほふ少女らし葦附取ると瀬に立たすらし」など「雄神川」「射水川」の歌が残っています。

その後、洪水のたびに野尻川から中村川、荒俣川、千保川へと、流路は西から東へ移動してきました。そして、1585 年の庄川上流が震源の大地震に伴う山崩れにより庄川町金屋で庄川が堰き止められたあと、千保川と中田川(現在の庄川流路)に分かれました。江戸時代の 1653 年にも洪水が起こり、前田利長の菩提寺である瑞龍寺と高岡、砺波平野を守るため、加賀藩の命により柳瀬普請、松川除(まつかわよけ、堤防)などの大工事が行われ、1714 年に松川除が完成し、庄川は中田川の川筋を流れるようになりました。それでも 1772 年、1831 年、そして前述した

1896 年にも大洪水が起こり、庄川と小矢部川の分離工事につながっていきました。

さて、以上のことは文末に挙げた種々の資料を参考にしました。岩屋(2010)は明治期に進展した全国の河川改修をまとめた土木学会編集の著作の 1 章で、庄川改修の詳細が述べられています。オランダ人技術者のムルデルとデ・レイケの果たした役割についても紹介しています。また、小矢部川の河口港である伏木港が重要港の位置づけにあったため、庄川・小矢部川の分離が庄川の洪水、土砂流出と密接不可分の関係にあったことを指摘しています。国土交通省(2001)は庄川のあらまし、歴史、文化、暮らし、自然などについて小学生にもわかるようにまとめられています。その他の資料も含め、一度読まれて、庄川の歴史に思いを馳せられることをお勧めします。

参考文献

- 安達實・三宅邦彦・北浦勝(1997)庄川河口の放水路建設、土木史研究、第 17 号、pp.235-242
- 岩屋隆夫(2010)庄川改修、土木学会編「沖野忠雄と明治改修」、pp.381-396、丸善
- 関西電力北陸支社(2001)インタビュー 庄川に記された洪水と治水の歴史、季刊誌「YAMABIKO」No.56、pp.2-3
- 関西電力北陸支社(2001)移動する暴れ川、季刊誌「YAMABIKO」No.56、pp.4-5
- 関西電力北陸支社(2001)庄川大改造、季刊誌「YAMABIKO」No.56、pp.6-8
- 国土交通省北陸地方整備局(2001)河川の歴史読本 庄川、89pp.

吉村和夫(2000) 沢田清兵衛・斉藤庄兵衛と庄
川改修「庄川流域に美田」が生まれる、高岡
の図書館、第 56 号、p.1



写真 六渡寺公民館に掲げられている古地図。「從加州金沢至武州江戸道中図(部分)」との注釈がある。右の川が小矢部川・庄川、左の川が神通川、中央に放生津潟が描かれている。